慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	呉・越の銅鐓の人俑
Sub Title	
Author	伊藤, 清司(Ito, Seiji)
Publisher	三田史学会
Publication year	1979
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.49, No.2/3 (1979. 6) ,p.52(162), 80(190), 142(252)- 52(162), 80(190), 142(252)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19790600-0052

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

呉・越の銅鐓の人俑

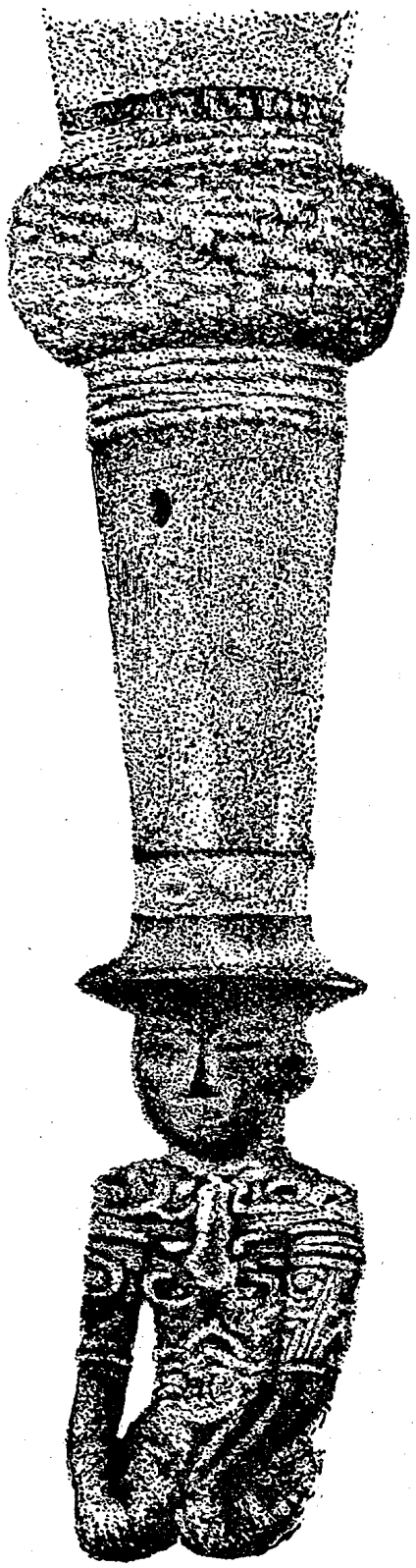
伊藤清司

一九七八年十一月、浙江省杭州市の西湖中の孤山にある省博物館を見学した際、とくに興味を惹かれた展示物のひとつに青銅製の鐓（錞）＝石突きがあった。同館の楊陸建氏の説明によれば、この銅鐓は一九七〇年、嘉興地区の呉興県埭溪鎮の出土物で、春秋時代のもの、すなわち、春秋期の呉・越の文物であるという。全長約二〇センチメートル。その全体の2/3に当る上部は下に向ってやや細めの円筒、つまり、鉛筆・ボールペン類のキャップ状を呈しており、その空洞の中に槍・矛類の武器の木柄をはめ込んで固定したものらしい。この円筒部の一部に釘を挿し込むための小孔がある。なお、この円筒部のほぼ中間に、環状のふくらみがあり、この部分に蟠虺文の類の文様が施されている。

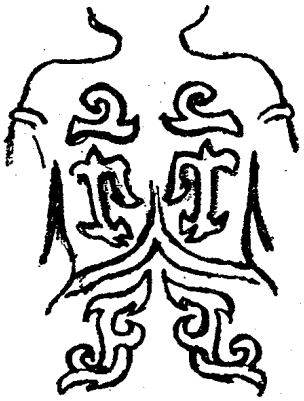
この銅鐓の下部の1/3は両膝を揃えて跪坐し、その膝の上に両手を置いた人物像となっている。興味を惹くのは、その体軀部に施されている文様である。楊氏の説明によると、これは鎧や衣裳類の着衣を示すものでも、また体文を表示したものでもなく、単なる文様にすぎないであろうという。この銅鐓についてはすでに、『文物』一九七二年第三期の七五ページに二〜三行にわたり、ごく簡単な報告が掲載されているが、この文様についてはなんらの言及もない。たまたま暮色の迫る薄暗い館内で、しかもケースのガラス越しに見たので、その文様の委細は定かでないが、虺竜文ないし夔鳳文の類に思われた。上述の中間部の蟠虺文との対比から見ても、楊氏の上述の説明は妥当かもしれなる。

「以下八〇頁へ続く」

「五二頁より続く」



第１図



第2図　背　面

単なる文様ではなく、文身を表現したものという考え方を捨てがたい。『文物』の説明でも、この人俑を奴隷と見ている点はこの際、注目される。

改めていうまでもなく、「被髪文身」は呉・越の民族の風俗として古来から知られている。この遺物の使用されていた春秋時代には、この地方で文身の習俗はなお盛んであった可能性が濃い。このような伝統文化はとくに、被支配者・庶民階層に長く保持されていたであろう。この人俑が奴隷を表わしたか否かは別として、石突きの装飾の対象にしかし、この文様が人物像の体軀部にのみ施されていること、兵器の下端に位置する石突きというその用途と、つつしましく跪坐するその俑の容姿から推想すると、それは

「以下一四二頁へ続く」

「八〇頁より続く」

されるような人物像は下層階級のものが当てられる蓋然性は高く、かつそのような階層社会には、文身の慣習が永くあとをとどめていた可能性が考えられるのである。

しかも、呉・越の文身習俗の由来について、中国史書は「以テ蛟竜ノ害ヲ避ク」（『漢書』地理志）と伝えている。呉・越地方の入墨の由来や目的に関するこの説明の妥否は別として、この由来に関する伝承は、当時の文身の文様が蛟竜の類に関係深いものであったことを想像させる。もし、この石突きの坐俑の体軀に施されている文様を竜蛇に関係があるものとすることができるならば、それを入墨の表現と見る可能性はけっしてないとはいえないであろう。

なお、この坐俑の頭部について付記する。その上部が帽子状に連接しているため、頭髪がどのように表現されているかを判断することはできないが、とくに結髪を想定させるようなものは認められない。であるからといって、それを短くきった頭髪を示しているとはもちろんいえないが、文身とともに、呉・越の習俗の特色とされる「剪髪」（『墨子』など）・「髪短」（『左伝』）・「断髪」（『史記』『漢書』）と見る可能性を全く否定するものとも思えない。

いずれにしろ、断定はもちろん今後に俟たなければならないが、もしこの銅鐓の坐俑の体文を入墨を描出したものとみることができるならば、これは先秦時代の東夷の文身に関する最初の貴重な一資料となるであろうと考え、参考までに紹介したしだいである。

なお、図の作成に当って国際基督教大学講師山本澄子・清泉女子大学教授五味充子の両先生のご協力をいただいた。